

地域共生社会の実現に向けて

「地域ネットワーク会議」から生まれた
住民主体の地域福祉活動
～登米市津山・豊里地域包括支援センターの取組～

地域共生社会の実現に向けた取組に欠かせない「コミュニティソーシャルワーク」の考え方は、「地域課題の把握と、地域全体で課題を共有するための話し合いの場の設定」が求められています。前号では、登米市社会福祉協議会（以下「登米市社協」という。）の防災福祉マップと生活支援サービスについて紹介しましたが今号では、登米市津山・豊里地域包括支援センター（以下「地域包括」という。）が行っている「地域ネットワーク会議」に着目し、管理者（主任介護支援専門員）の佐々木博尚さんやスタッフの皆さんから、住民主体の地域福祉活動についてお話を伺いました。

地域ネットワーク会議とはどのような会議ですか？

地域包括の業務の一つである「地域ケア会議の開催」として行っているものです。「ここでは、介護サービス事業者、地域の保健・福祉・医療の関係者、ボランティア、地域住民、行政機関などが連携し、地域課題の共有、ネットワーク構築、社会資源の開発に繋げるよう努めることを目的に開催しています。当初は顔つなぎの場として活用していましたが、現在は地域住民全員を対象とし、津山地区・豊里地区で年2回ずつ、30名〜40名が集まり会議を行っています。

地域ネットワーク会議で佐々木さんが大切にしていることは？

顔の見える関係づくりです。数年前、地域ネットワーク会議の中で住民の皆さんに「地域を住民同士で支えていきましょう」という話をしたところ、「そんなことできるわけない」との意見が多数でした。

それでも諦めずに住民の皆さんへ働きかけをしてきたことで、自分たちの地域は自分たちで支え合つことの大切さを少しずつ理解していただけるようになってきました。

地域課題が浮上したときに、住民同士で支え合える地域になってほしいという思いから、コツコツと啓発活動を行うことを大切にしています。

地域ネットワーク会議から始まった活動は？

「防災福祉マップの作成」です。きっかけは、平成30年に津山診

療所が閉鎖になり、市民病院から地域の実情を知りたいと相談を受けたことでした。そこで、住民を含む地域の様々な関係者で意見交換を行ったところ、多くの地域課題やニーズが見えてきました。

具体的には「交通手段の問題（通院、買い物ができない）や「見守り声掛け・話し相手・集いの場の必要性」「若い世代の減少・世代間交流の減少」などでした。そこで、以前から交通手段の問題の相談があった横山1・2区を対象に、地域課題について行政区长、民生委員、登米市社協、市民病院、行政機関、公民館、地域包括で検討しました。

〈地域課題に対する横山1・2区の住民の皆さんの意見〉

① 交通手段の問題

↓必要性はあるが、地域だけでは難しい。取組には時間と費用がかかる。

② 見守り声掛け・話し相手・集いの場

↓地域の協力があればできる。
③ 若い世代の減少や世代間交流
↓地域の協力があればできる。

〈横山1・2区の現状〉

・見守り・話し相手・集いの場について

ミニデイサービス、お茶のみ会を定期的に実施している。男性の参加者が少ないこと、介護保険サービスを利用しての方の参加が少ないことが課題。一人暮らし、高齢者世帯の方へは行政区長、民生委員が中心となり声掛け、見守りを実施している。

・世代間交流について

コミュニティ組織があり、行政区行事の時は、参加率が低いが男性も若い世代も参加している。防災関係の行事の際も消防団の協力を得ながら活動できている。



▲「防災福祉マップ」作成の様子

域の多くの方に関わっていただき「つながる」ことの大切さを再確認するきっかけになりました。

「コミュニティ組織があり、地区行事も実施している。若い世代との交流も全くないわけではない。地域のことを知る「きっかけ」があれば、男性も若い世代も集まることわかった。

〈会議を通して見えてきたこと〉

この会議内容を踏まえて、登米市社協から地域の情報を共有できるツールとして「防災福祉マップづくり」の提案があり、地域のことを知るきっかけづくりとして、作成に至りました。防災福祉マップは「地域の安心地図」であり、マップを作成する過程で地域の課題を見つけ、その課題に地域でどのように対応するか、地

防災福祉マップについての佐々木さんの意見

防災福祉マップの情報は最新であることが大切なので、作成したら終了ではなく定期的な見直しを行う必要があります。防災福祉マップを作成したことで住民同士が自主的に集う機会が増え、地域の課題を我が事として考える意識づけにつながっているように感じます。防災福祉マップは、地域のことを考えるきっかけに過ぎず、こちらから何かをやりましようと思いを掛けると、住民から理解は得られませんが、だからこそ、住民主体の地域づくりが大切だと思っています。

また、私自身は「地域課題は解決しなくてはいけないもの」と思っていました。地域で浮上する様々な課題と向き合ってきた経験から、解決できない場合もあることに気がつきました。解決することがゴールではなく、課題を地域に問いかけて、地域住民自身が考えられるよう

にきっかけを作ることや、結果ではなくプロセスが大切だということに気づき、課題を解決できないことで抱えていたモヤモヤが晴れました。

取材を終えて

「防災福祉マップの作成は、地域包括だけではできなかった」と、佐々木さんは話してくれました。取材を通じて改めて、防災福祉マップづくりのようなコミュニティソーシャルワークの課題共有の場づくりには、地域で活動する団体、各種関係機関、住民とのネットワーク構築が必要不可欠であり、登米市津山・豊里地域包括支援センターが行っている「地域の中で支え合つことの大切さを丁寧に働きかけること」が肝心であることがわかりました。